

ハンドボール競技におけるバックコートプレイヤーの1:1の突破プレーに関する研究

-男子大学生を対象にして-

福島 慶一 (200912070、ハンドボール方法論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：1:1の突破、フェイント

【目的】

ハンドボール競技において攻撃を組み立てるエリアであるバックコートからのシュートで最もシュート成功率が高いのは、フェイントによる1:1の突破からのカットインシュートである。

そこで本研究では、バックコートプレイヤーのフェイントによる1:1の突破を対象に、有効なフェイントについて、フェイントの始まる前、フェイントの始まった後の局面に分けて検討し、1:1の突破に関する指導に有用な知見を得ることを目的とする。

【方法】

2012年関東学生ハンドボール男子1部リーグの18試合を分析対象にした。

分析項目は以下の11項目であり、分析項目ごとに生起数をカウントした。

[フェイントが始まる前]

(1) OFのポジション (2) OFの位置 (3) DFとの距離 (4) DFの位置

[フェイントが始まった後]

(1) フェイントの種類 (2) 方向 (3) 2歩目の方向 (4) 2歩目の脚 (5) 歩数 (6) ドリブル (7) プレー結果

各分析項目とプレー結果との関係を明らかにするためにカイ2乗検定と残差分析を行った。統計処理の有意差は5%で判定した。

【結果と考察】

1. フェイントが始まる前

プレー結果との間に有意な関係にあった項目は、DFとの距離とDFの位置の2つであった。DFとの距離に関しては、DFとの距離が遠いとシュートに行けること、DFとの距離が近いとフリースローになってしまうことが明らかになった。DFの位置に関しては、DFの位置が低いとシュートに行けること、DFの位置が高いとパスが多くなることが明らかになった。

これらのことから、DFの位置が低くDFとの距離が遠いと、余裕をもってプレーしシュート達成できること、DFとの距離が近いと間合いがとれなく、DFに接触されフリースローになること、DFの位置が高いとDFを突破してもフォローのDFが間に合うためパスが多くなることが考えられる。

2. フェイントの始まった後

プレー結果との間に有意な関係にあった項目は、フェイントの種類、方向、歩数、2歩目の方向の4つであった。フェイントの種類に関しては、0ステップフェイントはシュートに行けること、回旋フェイントはフリースローになってしまうこと、0-1フェイントはパスが多くなることが明らかになった。方向に関しては、利き手→非利き手→利き手はパスが多くなることが明らかになった。歩数に関しては、2歩でのプレーはシュートに行けること、3歩でのプレーはフリースローになってしまうことが明らかになった(表1)。2歩目の方向に関しては、2歩目の方向が横だとパスが多くなることが明らかになった。

これらのことから、ボールをもらう前に走り込みボールをもらうときに止まることでスピードに緩急をつけられる0ステップフェイントや少ない歩数でプレーすることでシュート達成できること、DFの近くで腕をまわす回旋フェイントはフリースローになりやすいこと、2歩目の方向が横で利き手の方向に抜くと、DFと十分な間合いがとれ、カバーのDFがシュートを防ごうと守りにくるためパスが多くなることが考えられる。

表1 歩数と結果との関係

	2歩	3歩
シュート	94(67.6%)*	92(46.5%)°
フリースロー	30(21.6%)°	82(41.4%)*
パス	15(10.8%)	24(12.1%)
合計	139(100%)	198(100%)

カイ2乗値=16.4, p<0.05

*…有意に多い

°…有意に少ない

【結論】

本研究の結果から次の3点が実践現場に提言できる。

- 1) DFとの距離が近いとフリースローになるため、遠い距離でフェイントをする。
- 2) DFの位置が低い時は、積極的に1:1をしかける。
- 3) シュートのためには、多くの歩数を使わず、ボディフェイクをしない0ステップフェイントがよい。